読むメッセージ ――イエスとの出会い―― ⑥　　BY 関真士牧師

「真の癒しをもたらす信仰」

そこに、十二年の間、長血をわずらい、医者たちに財産すべてを費やしたのに、だれにも治してもらえなかった女の人がいた。彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。すると、ただちに出血が止まった。イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。大勢の人たちが、あなたを囲んで押し合っています」と言った。しかし、イエスは言われた。「だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。」彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し、イエスにさわった理由と、ただちに癒やされた次第を、すべての民の前で話した。イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」ルカの福音書 8 章 43～48 節

5 重苦の苦しみ

この女性は 12 年間に亘り、長血という病に苦しんできました。出血のために、痛み、貧血、倦怠感が常にあったと思われます。またマルコ 5 章 26 節では、「この女は多くの医者からひどい目に会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまったが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。」とあります。

治りたい一心で医者のところに行き、ひどい目にあわされても今度こそはと別の医者を探し、そうしているうちに病状は悪化し、持ち物までもが皆なくなってしまったのです。

この女性は、病の身体的苦しみ、人からひどい目にあわされるという心の苦しみ、財産を失うという経済的な苦しみ、そればかりか霊的な苦しみを負っています。この長血という病は、レビ記 15 章 25 節以降によれば、汚れに規定されています。この女性自身はもちろん、女性が触れた物も汚れ、その物に触った者も汚れるのです。ですから社会的に疎外され、主を礼拝する会衆からも除外されているのです。この女性は、心、身体、生活、社会、霊という五重苦をその身に負っているのです。それが 12 年間という長きに亘って続いているのですから、もはや万策尽きたということです。

しかし、この女性にも 12 年目がやってきました。「12」という数字は、神がこの地上に御業を現わすのに用いる数字です。12 部族を通して、12 使徒を通して、12 歳のヤイロの娘を通して、12 のかごを通して、神はご自身の業を現わしました。

この女性は、今 12 年目を迎えています。それは、この女性の上に神の時が来たという意味です。私たちにも必ずその時はやってきます。

ある人にとっては、生きることは苦しみに合うことだと思わずにはおれない時があります。しかし、神の時は必ずきます。万策尽きたと思ったら、その時が神の時です。なぜなら、神にしか頼れない、神を求めるしかないという状況だからです。人の危機は、神の好機です。

私たちが、神の好機を捉えるために必要なのは「信仰」です。イエスは、女性に対して「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言われました。私たちも、この女性の信仰に学び、神の時に備えていきましょう。

イエスに触れようとする信仰

マタイ 9 章 21 節によれば、この女性は「『着物にさわることでもできれば、きっと直る』と心のうちで考えていたからである。」と記されています。

この時の女性の姿を想像できますか？　顔が見えないようにベールで顔を覆っていたでしょう。彼女は、この後イエスの衣の房に触ったのですから（房は衣の裾に付いている）、まさに地を這いながら、弱った体から力を振り絞り、やっとの思いでイエスに近づいて行ったのです。

ここで注目すべきは、この女性は、イエスに触れていただくことを求めたのではありません。自分から触れようとしているのです。「どうか、あなたの御心なら手を置いて癒してください。」ではないのです。自分の方から主に近づき、手を伸ばし、触れようとしているのです。

しかも、ただ触れるということではありません。この女性は、分かっているはずです。自分が触れるものは汚れてしまうということを。イエスに触るということは、自分が癒される代わりにイエスに汚れがうつるということなのです。

あなただったら、それでもイエスに触れようと思いますか？　お身体に直接は無理だから、せめて着物ならと思うでしょうか。それも同じことです。自分が触れたらイエスを汚すことになるとするなら、それでもなお手を伸ばすことができますか。

ここで私たちは、イエスのお心に想いを向けたいと思います。イエスご自身は、どうすることを望んでいるでしょうか。そんな汚れた手で触って欲しくないでしょうか。あるいは、わたしの方から触れるまで待ちなさいと言うでしょうか。

イエスは、汚れた手で触れたこの女性に対して、「安心して行きなさい。」と言われました。イエスは、汚れた手で触れられたことを受け入れてくださったのです。

自分の方からイエスに手を伸ばす、しかも汚れたままの手でイエスに触れる、これがこの女性の信仰です。そして、それを受け入れてくださったイエスのお姿に、やがて来る十字架の救いが予表されています。私たちの汚れ、罪、痛み、病のすべてをその身に引き受けて、代わりに私たちを救ってくださったのです。

さてこれで、この女性の癒しの物語は成立したかのように思えますが、実は、これだけではないのです。ただ手を伸ばし、触れるだけでは、真の癒しは流れて来ないのです。

確かに、汚れたままの手で自分の方からイエスに触れようとする信仰は、この女性の信仰でした。しかし、それはあくまでも始まりなのです。この女性がイエスに触れる前に、一つの大きなチャレンジがあったのです。このチャレンジを受け止めないと、真の癒しは流れて来ないのです。そして、そのチャレンジを経た信仰こそ、まさに「あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われた、女性の信仰なのです。

着物のふさをつかむ信仰

　この女性がイエスに触れたとき、イエスは、ご自身の身体から力が出ていくのを感じたというのです。
　多くの群衆が押し合いへし合い、イエスのお身体や着物に触れていたと思うのです。しかしその中で、この女性にだけイエスの力は流れたのです。なぜ、この女性にだけ？　ここがこの物語の要点です。
　なぜ、他の人々ではなく、この女性にだけイエスの力は流れたのでしょうか。この大勢の中で、一番信仰が強かったから？　あるいは、求める気持ち、切実さ、主にだけ頼る心…が他の誰よりも一番強かったからでしょうか。
　でも、そうすると信仰の競争をしているみたいです。主日礼拝の中で「今日この中で一番切実に求めている人が主の癒しを経験できます」となったらそれは違うでしょう。それでは、何なのでしょうか。
　御言葉をよく見ると、おそらく、この女性だけが触った場所が違っていたのです。この女性が触れたのは「着物のふさ」なのです。
　「着物のふさ」については、民数記 15 章 38 節に記されています。「イスラエル人に告げて、彼らが代々にわたり、着物のすその四隅にふさを作り、その隅のふさに青いひもをつけるように言え。」その目的は、この房を見るたびに「主のすべての命令を思い起こし、それを行うため」(39) とあります。
　この女性は、「ふさ」に触ろうと思っていたのではありません。ただ、手を伸ばして着物に触れようとしたその瞬間に、その手の先に「ふさ」が現れたのです。
　この「ふさ」の意味は、ユダヤ人なら誰でも知っているはずです。神の命令のすべてを想起させるものです。この女性にとって神の命令とは、自分を汚れている者として定めるものです。瞬間的に、彼女は「私は汚れた者だ」と思ったことでしょう。それは、自分はこの場に居てはいけないと思わせるものです。
　しかし、この女性は、「ふさ」をつかんだのです。これが彼女の信仰です。
　「ふさ」は、神の義を示します。それは「汚れた手で触れてはならない」と語りかけます。主は、彼女にだけ、レビ記の汚れの規定を免除したのではありません。「ふさ」を目の前にして、自分が汚れた者であることを突きつけられます。
　しかし彼女は「ふさ」をつかみました。それは、「私を汚れに定める主だけが、私を清めることが出来る」という信仰を表しています。彼女は、「ふさ＝神の義」を無視したのでも、逆らったのでもないのです。それを真正面から受け止めたのです。
　あなたにあなたの罪を示す方が、あなたの救い主なのです。あなたにあなたの傷を示す方が、あなたの癒し主なのです。あなたにあなたの暗闇を示す方が、あなたの光の主なのです。あなたにあなたの汚れを示す方が、あなたを清めるお方なのです。
　あなたの目の前に「ふさ」を置く＝神の義を示す方が、真の救い主なのです。「ふさ」が置かれることなく、ただありのままでいいと言われるなら、そこには真の癒しはないのです。
　「ふさ」をつかむ信仰とは、まさに十字架信仰です。十字架のイエスにこそ、神の愛と神

の義があります。十字架の主を仰ぎ見るとき、私たちは、自分の罪を示され、同時に神の愛を知ります。十字架のもとからイエスの癒しは流れていくのです。。

彼女は、自分がとんでもないことをしたことを自覚していました。汚れた手で触ってしまったことの重大さを知っているからこそ「彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し」たのです。その時イエスは、「娘よ。あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」と語ってくださったのです。

真の癒しとは

真の癒しとは、イエスの癒しです。イエスの癒しは十字架のもとから流れ出ています。イエスの癒しとこの世の癒しの決定的な違いは、ここにあります。この世の癒しは、悔い改め抜きの癒しです。それは、古い人を癒すことになります。古い人を癒してはならないのです。

イエスの癒しは、悔い改めを前提とした癒しです。私たちは、ありのままで、汚れたままで、罪深いままで、主のもとに行くことが出来ます。なぜなら主は「罪人を招いている」からです。そして、私たちは、汚れた手のままで主に触れようとします。しかしその瞬間、目の前に「ふさ＝神の義」が置かれるのです。それは、そのままでは「触れてはならない」ということなのです。

罪人のままで招かれているのに、罪人のままではダメだと言われるのです。一見、矛盾のように思えます。パーティに招かれて招待状を持って会場に行ったところ、そこにはドレスコードがあって、ネクタイを忘れたために入ることが出来なかったというのと似ています。確かに招ねかれているのに、そのままでは入れないのです。

主の招きに入るために必要なのは、ネクタイではなく信仰です。その信仰とは、神の義の前に自らが汚れた罪人であることを認めることと、イエスが十字架で私の罪と汚れをその身に負って命を捨ててくださったことを信じることなのです。それが「ふさ」をつかむということです。

イエスの癒しは、古い人を癒すのではありません。罪と汚れを許容するのではありません。むしろ古い人は十字架でキリストと共に死ぬのです。イエスの癒しは、私たちをキリストと共に蘇らせ、新しい人として造り変えるものなのです。

あなたの目の前に「ふさ」が現れたとき、あなたは、その「ふさ」をつかむことができますか。